

昔むかし、あるところに、ひとりの伯爵はくしやくがいました。

あるとき、伯爵は、狩りに出て森の中で道にまよってしまいました。道をさがしていると明かりが見えたので、それをめがけて歩いていきました。そこは、宿屋でした。伯爵は、そこで食べたり飲んだりして、ひと晩泊とまりました。

つぎの朝、窓まどから外を見ると、宿屋のうらに池があつて、美しい娘むすめが七人、およいでいました。伯爵は急いで台所へおりていき、宿屋のおかみさんに、

「うらの池でおよいでいる美しい娘たちは、いったいだれだね」とききました。おかみさんは、

「あれは、七羽のはとでね、毎朝とんでくるんですよ。そして、岸に降りたつと娘になるんですよ。それから肌着はだぎをぬいで水あびをするんです」といいました。伯爵が、

「あの娘をひとり手に入れることはできないだろうか」ときくと、おかみさんはいいました。

「それはむずかしいことじゃありませんよ。あした、娘たちが水あびに来たら、肌着一枚お取りなさい。そしたら、その娘はとべなくなつて、あなたのところのこるでしょう。でもね、その肌着は決して手放てばなしてはいけませんよ。もし手放したら、娘はすぐになげてしまいますからね」

伯爵は、つぎの朝早く、池のほとりに行って、こっそりやぶのかげに身をかくしました。

まもなく、はとが七羽とんできたかと思うと、あつというまに娘のすがたになりました。それから、肌着をぬいで水に入つていきました。伯爵は、一番美しい娘の肌着をこっそりぬすんで、またやぶのかげにかくれました。

娘たちは、楽しく水あびをしていましたが、やがて水からあがつて、それぞれ肌着を着ようとなりました。ところが、ひとりだけ肌着が見つかりません。あとの六人は肌着をつけてはとになり、とんでいってしまいました。のこった娘は、泣きながら肌着をさがしました。

伯爵は、やぶのかげから出ていって、娘に、

「わたしの屋敷やしきにこないかね」といいました。そして、娘を馬に乗せて屋敷につれて帰

り、ふたりは結婚けっこんしました。

二、三年経ったころ、伯爵は戦争に行くことになりました。伯爵が行ってしまうと、妻つまは毎日悲しそうにしていました。伯爵の年とった母親が、

「どうしてそんなに悲しんでるんです。あの子はじきに帰ってくるじゃありませんか」といいました。妻は、

「いえ、わたしが悲しんでいるのはそのことではないのです。わたし、お城の中はぜんぶ見てまわったんですけど、ひとつだけ、どうしても開けられない長持ながもちがあるのです。それが悲しいのです」といいました。

母親は、その長持ちのかぎを伯爵からあずかって持っていました。伯爵は出かけるときに、

「このかぎは決して人にわたしてはなりません。そうでないと、不幸が降りかかるのです」といつていたのです。けれども、母親は、若い妻があまりに悲しむを見て、かわいそうになり、

「かぎをわたしたってそんなにまずいことにはなるまい」と思って、わたしてしまいました。

妻は、すぐに長持ちを開けました。するとそこに、自分の肌着がしまっていました。

妻は、肌着を手にとったとたん、はとになって、いくつもの山をこえた地の果てまでとんでいってしまいました。

伯爵が戦争から帰ってくると、妻がいません。母親がひとりで泣いていました。

「おかあさん、妻はどこですか」と、伯爵がたずねると、母親は、

「おまえが留守るすのあいだに、あのかぎをわたしてしまったのです。そうしたら、あの人 はとになってとんでいってしまいました」と話しました。

伯爵は、何もいわず、すぐまた馬にとび乗って、森の中のあの宿屋へ向かいました。

そして、宿屋のおかみさんに、

「妻が、はとになってとんでいってしまったんだ」と話しました。すると、おかみさんはいいました。

「はとはもうこの池には来ませんよ。あの娘たちは、ブロックス山の母親のところ、七匹のやぎになって山をかけまわっています。そのうちのいっぴきの角つのをつかんで、すばやくとび乗れるかどうかやってごらんさい。うまくとび乗れたら、そのやぎはあん

たをのせて山のとっぺんまでかけ上っていくでしょう。でも、てっぺんについたら用心するんですよ。その母親は悪い魔女まじょですからね」

伯爵は、ブロックス山へ向かって馬を進めました。夜も昼も旅をつづけ、ある朝、ようやくブロックス山のふもとに着きました。伯爵は馬を森にのこして、やぶのかげに身をかくしました。まもなく、七匹のやぎが山をかけ下りてきました。伯爵はすばやくいっぴきのやぎの角をつかんでとび乗りました。やぎは、伯爵を乗せて山のとっぺんの家までかけあがりました。

伯爵がやぎからおりと、家の中から年とった魔女が出てきて、何の用かとききました。伯爵が、

「妻に会いたくて来ました」というと、魔女は、

「じゃあ、会わせてやろう。こっちへおいで」といって、伯爵を居間に通しました。すると、そこに、妻が立っていました。ふたりはおおよろこびしました。伯爵が妻をつれて帰ろうとすると、魔女が、

「待て」といいました。

「そうはいかないよ。まずおまえの力を見せてもらおう。家のうらに大きなみみの木の森があるから、あした、あの森を切り倒してまきにするんだ。夕方までにぜんぶできたら娘をやろう。そうでなきゃ、やらない」

夜になって、妻とふたりきりになると、伯爵はすっかり悲しくなって、

「あなたをつれて帰ることは、とうていできそうにないよ。あの森は、逆立ちさかだしたって一日では切り倒せない」といいました。妻は、

「まあ、たいしてむずかしくありませんわ。あなたは、母に、朝ごはんをわたしに運ばせるようにたのんでください。あとは、わたしひとりできますから」といいました。

あくる朝、伯爵は森へ出かける前に、魔女にいいました。

「わたしの朝ごはんを妻に運ばせてくれませんか」

魔女は、

「ああ、かまわないよ」といいました。

伯爵が森でほんのすこし木を切ったころ、妻が朝ごはんを運んできました。

「さあ、たっぷり食べて、食べ終わったら横になってお眠ねむりなさい」と妻はいいました。

伯爵は、いわれたとおりに横になって寝ました。目をさますと、森の木はぜんぶ切り倒さ

れていて、まきのたばが積みあげられていました。

夕方、魔女がやって来て、仕事ができあがっているのをたしかめていました。

「きょうのところは、まんぞくだよ。あしたは、このむこうの広い牧草地の草をぜんぶ刈るんだ。そうでなきゃ、娘はやらない」

つぎの日、伯爵が牧草地で草を刈っていると、妻が朝ごはんを運んできました。伯爵は、たっぷり食べてから、横になって眠りました。目をさますと、草はぜんぶ刈りとられていました。

夕方、魔女がやって来ていいました。

「きょうもうまくやったね。じゃあ、あしたはこの下の池の中に礼拝堂れいはいどうを立てて、こちらの岸から礼拝堂まで橋をかけるんだよ」

これもまた、妻がうまくやりました。礼拝堂と橋ができあがると、妻がいました。

「夕方、母が来たら気をつけてくださいね。きっと、いっしょにこの橋をわたって礼拝堂の中を見せてくれというでしょう。でも決してそのとおりにしてはいけませんよ。あなたをおぼれさせるつもりですから」

夕方、魔女がやって来ました。魔女は、仕事ですっかりできているのを見ると、

「おやおや、これはほんとうによくできている。では、いっしょに橋をわたって行って、礼拝堂の中を見せてもらおう」といいました。伯爵は、

「いいえ。わたしひとりならわたりますが、いっしょにならわたりません」とことわりました。魔女はおこって大声でののしりました。そのとたん、礼拝堂と橋が大きな音を立ててくずれ落ちました。

夜になって、みなが寝しずまると、妻は伯爵を起こして、

「もうこれ以上ここにいられません。母がとてもおこって、あした、あなたをころそうとたくらんでいます」といいました。

ふたりは、しのび足で家を出ると、力の続く限り走ってにげました。

朝になって、魔女は、ふたりのベッドが空からになっているのを見つけました。そこで、上の娘に、

「いそいで百マイル靴くつをはいて妹をつれもどしておいで」と命令しました。

上の娘は走りだしました。妻は、ねえさんが追いかけてくるのを見ると、夫をばらのやぶに変身させ、自分はばらの花になって枝にくっつきました。ねえさんは気づかず通

りすぎていきました。そして、国境まで行ってから、家まで引き返してきました。魔女が、

「見つけれなかったのかい」ときくと、上の娘は、

「だめだめ、人っ子ひとりいなかった」といいました。

「道に何か変わったものはなかったかい」

「ばらのやぶがあつて、ばらの花がさいてたよ」

魔女は、

「おまえはなんてぬけてるんだ。そのばらをおつてしまえばよかったのに。そうすれば、やつらをつかまえられたのに」といいました。そして、二番目の娘に、

「いそいで二百マイル靴をはいて妹をつれもどしておいで」と命令しました。

二番目の娘はあらん限りの力を出して走りだしました。妻は、ねえさんが追いかけてくるのを見ると、夫を礼拝堂に変身させ、自分は神父しんぶになりました。ねえさんが礼拝堂に入っていくと、神父がお説教せつきょうをしているだけでした。

二番目の娘が帰ってくると、魔女は、

「見つけれなかったのかい」とききました。

「だめだめ、人っ子ひとりいなかった」

「道に何か変わったものはなかったかい」

「きれいな礼拝堂があつて、神父さんが夢中むちゅうでお説教をしていたよ」

魔女は、

「おまえはなんてぬけてるんだ。その神父のずきんをはいで取ってくればよかったのに。そうすれば、やつらをつかまえられたのに。さあ、こんどはわたしがじぶんでおいかけなきやあ」といいました。そして、三百マイル靴をはいて、家からとびだしていきました。

魔女が国境に着いたとき、伯爵と妻は、ちょうど国境をこえたところでした。魔女は、娘を伯爵からとり返すことができないと分かれると、ポケットからくるみの実をとり出して、娘にむかつて投げました。娘がその実を取って開けてみると、中には黄金がつまっています。それは、いくら使ってもなくなる黄金でした。

村上郁再話